第５分科会：歴史

渤海国旅遊路の開発整備に関する研究（その３）

青　木　雅　明（東洋大学）

１．研究の経緯と今回報告の目的

（研究の背景）現在からおおよそ1300～1100年前、日本海を挟んだ日本列島の対岸にツングース系種族である靺鞨族が定住していた。彼らは半狩半農民であったが、既に渤海国（698～926年）という王国を形成していた。その王朝は頻繁に奈良朝および平安朝へ外交使節を送って友好関係を築いたため、日本の歴史書にはその事蹟が詳しく書き残されている。興味深いことに、日渤交流の頻度は同時代日本外交の主軸であった日唐交流よりも多い。渤海国の遺跡、遺物は中国東北地方やロシア沿海州に広く散在しているが、残念なことに文書記録がほとんど残されていない。そのため、唐文明を導入して高い生活文化を享受した筈にもかかわらず、その全貌は明らかではない。こうした中で、渤海史の研究者は中国吉林省を中心に一定数に達しており、現地では考古学的発掘調査が徐々に進められている。

（研究の動機と経過）観光客は現実世界を旅すると同時に、旅先のモニュメントに触発されて過去の想像世界へも旅立って行く。このため、環日本海地域における観光は、渤海王国の遺跡・遺物を発掘採集・研究して過去の世界を再現しつつある学術研究（考古学、民族学、歴史学など）と良い協力関係を築く可能性がある。本研究はその具体的方法を描くとともに、それが環日本海地域の活性化に寄与することを立証しようとしている。一昨年の第８回研究大会では「渤海国旅遊路の開発整備に関する研究」としてその基本構想を報告し、また昨年の第９回研究大会では「渤海国旅遊路の開発整備に関する研究（その２）」として現地概観調査（コンセプト・レベルのフィジビリテイ・スタデイ）について報告した。前者の方は、学術研究および観光振興の目的で実物大の渤海王国回想地域を設営する構想となっている。両者の要旨はそれぞれ「環日本海研究」の第９号および第10号に掲載されている。

（今回報告の目的）このように渤海国の学術研究と観光を両立させ相互支援体制を確立しようとしているが、今回は観光の側面に注目し、その属性を広い視野から再検討する。特に、観光の専門家や観光産業に属する人も含めて、多くの人が誤解している重要な点があるので、それを中心に「観光像」を改め、学術と観光の融合への途を開くことに寄与したい。

２．定義に関わる観光の属性の再認識

観光は通常「日常の生活地域を離れ、他の土地の風景や史跡などを見物し、楽しみながら旅行すること」（日本語大辞典）などと定義される。このうち、楽しみは主として「日常の生活地域を離れ、他の土地を旅行する（そこで移動したり、滞在したりする）こと」から生まれるのか、それとも（特定の）「風景や史跡などの見物」から生まれるのかについて、多くの人に誤解がある。自分が前者に当てはまるにもかかわらず、自分も含めて大多数の人が後者に当てはまると考えているようだ。

「観光」の楽しみの多くは、日常生活のしがらみから離脱して非日常の世界を漂泊する旅そのものから発生するのである。これに比べると風景や史

跡などの「観光対象」（Attractions）は楽しみの中で付加的、副次的な役割しか果たさない。特定のものやその品質にはさほどこだわらず、ある程度満足できるものがあればそれで十分なのである。観光する人にとって、それは軽易なもの、一過性のものとして選択されている。

「観光」とは光り輝くものを見るという意味であるため、この用語の採用が「見物こそ観光のすべてである」という見物中心主義の誤解を生む原因となったのかも知れない。

3．観光資源の再定義

「観光資源」とは「観光の対象となる景観・行事・習俗など」（日本語大辞典）とされ、「観光対象となり得る資源」言い換えれば「潜在的な観光対象」のことである。

他方、「資源」の一般的な意味は「生産活動のもとになる物質・水力・労働力などの総称」（広辞苑）とされ、観光資源も「観光生産活動」言い換えれば「観光というサービスを生産する活動」のもとになる物質・水力・労働力などの総称であることが示唆される。

経済学では「資源」とは生産のもとになる自然（土地）、労働力、資本と定義されており、生産の三要素とも呼ばれる。これに対応して、観光経済学の分野では観光資源は①土地・鉱物・水・生物などの自然資源、②人的労働および企業などの労働資源、③他の資源の価値を人工的に上昇させる資本資源からなっている、と広範囲、包括的に定義している。つまり、観光資源を「観光対象となり得る資源」と狭義に捉えず、「観光生産のためのすべての資源」と広義に捉えている。

この広い定義を用いると、観光のあり方を検討する場合、見物（観光対象）資源以外の観光資源の重要性をも考慮することとなる有利性がある。また、上記2に照らすと、観光対象だけを重視し過ぎないという意味で、適切である。

さらに注目されるのは、観光生産または観光産業に利用される資源には公的部門の所有、管理、または関与しているものの割合が大きいことである。すなわち、上記①は政府の所有や管理責任の下に置かれているものが極めて多いし、その中には気候、文化、遺産などの無料の「自由資源」も含まている。また、上記②の中に含まれる企業などは人的労働を組織化する社会的仕組みであるが、そこには公的企業のほかに中央・地方の政府その他の公的機関も含まれ、両者が大きな役割を果たしている。さらに、上記③の資本は民間資本と公的資本に分かれるが、道路、鉄道、空港、港湾、交通制御施設などに見られるように、公的資本または中央・地方政府が深く介入している民間資本の役割が他の産業の場合に比べて著しく大きい。そうすると、観光政策の見方が大きく転換せざるをえないことになる。

4．観光政策の転換

上記2から、観光の見方を現在の見物中心主義（または観光対象重視主義）から旅行中心主義に転換すべきである。なお、ここでの旅行とは、特定の目的を達成するための手段としての旅行ではなく、旅行そのものが目的である「自由な旅行」または「旅行者の自由意志に基づく旅行」のことである。

次に、上記3から観光対象資源は至る所にある、あるいはあらゆる存在は容易に観光対象になり得るという「観光対象資源遍在論」に立つことになる。現在不足しているのは、観光対象資源ではなく、与えられた地域の資源から良い観光対象を作る「人的資源」の方であるとの認識が得られる。優れた専門家という人的観光資源こそが現在要請されていることとなろう。

他方では、交通施設、宿泊施設、休憩施設や都市全体の安全性・利便性・快適性を飛躍的に向上させることによって観光サービスの生産が高まることが理解される。同時に、接客サービスなどの向上が、ハイテク設備の導入による労働生産性の

向上とあいまって重要であり、そのため労働資源を向上させる教育訓練、資本資源を改善する設備投資の不可欠なことが認識される。

さらには、都市および農山漁村の景観を統一的、系統的に美化することが必要である。これには地方政府という労働資源が観光振興におけるその重要性を認識し、先導することが欠かせない。このようにして観光のあり方全体がアトラクション重視からアメニテイ（amenity、生活環境の快適性）重視へと変ることは、優れた観光生産物が産出されることになり、観光政策上良い選択がなされることを意味する。

日本においては、観光の観点から自動車中心の「道」の見直しが求められている。交通渋滞などによる自家用車交通の行き詰まりが見られる一方、高齢化の進行と健康への関心の高まりに対応して公共交通機関の充実と歩道・輪道の整備が良い政策選択である。

その中で効果の高いものとしては、里山地帯を通る日本縦貫遊歩道や渤海王国遺跡 — 新羅王国遺跡 — 平城京址 — 平安京址を循環する環日本海サイクル（春夏秋）／スキー（冬）・ロードが考えられる。そうした道路の開通は内外の旅行者から歓迎されると考えられるし、東アジアにおいて日本全域をひとまとまりの観光地として印象付ける強いインパクトを生むように考えられる。

さらに、安全・清潔・簡易・低廉なホテルの導入など宿泊施設の多様化も切実な問題である。

これを実現するためには規制緩和などの競争促進策が有効かも知れない。

いずれにしても、観光生産分野では他の産業と比較して中央・地方政府および公的機関の管理または関与している生産資源の割合が圧倒的に大きい。このため、現在良い観光が振るわないならば、それはほとんど政府の責任であり、民間企業のイニシャチブが不足しているためであるとは言えない。このことを観光の専門家や観光産業に属する人も含めて、多くの日本人が認識する必要がある。

COMMENT

金　光林（新潟産業大学）

①青木先生が渤海国旅遊路の開発整備について熱心に研究されていることを評価した。渤海国は歴史上、唐・日本・新羅とも関わりを持っていたので、渤海国の歴史は現在の中国、韓国・朝鮮、日本のいずれの国々においても関心が持たれるところである。そこで、渤海国歴史遺跡の観光化は確かに魅力的なものだと思われる。ところで、渤海国の遺跡が多く残っている中国では、現在渤海国の歴史遺跡の観光化についてどういう具体的なプランを持ち、実践しているのか、そこも知りたい。

②青木先生が提示している渤海王国遺跡・新羅王国遺跡・日本の平城京址・平安京址を循環する環日本海サイクルはたいへん魅力的であるが、複数の国を跨る歴史観光が現実的には観光ルートとして大衆化させるのが難しいのではないか。それが大衆化するためには、環日本海地域の国々の関係がさらに緊密化し、交通手段の開発・整備が必要である。

③報告内容の中の「研究の背景」において、渤海史の東アジアにおける位置づけについてもう少し述べればよかったと思う。渤海史は中国史の範疇だけで片付けることが難しいのである。渤海が高句麗を継承する形で建国され、渤海の構成員の中に高句麗人が入っていたことを考えれば、渤海史は朝鮮史とも関わりを持つ。そのために、渤海史は中国史、朝鮮史の両方の歴史の範疇の中で解釈される要素を持ち、中国と朝鮮の一国史観を超えた東アジア史観を以て渤海国の歴史を証明することが大事だと思う。